

聖書：Ⅱサムエル9：1～13

説教題：神の恵みを施す

日時：2018年5月27日（夕拝）

ダビデは今日の章でサウルの家のものでまだ生き残っている人に真実を尽くしたいと言います。前の8章では、ダビデ契約に従って、ダビデが主の力により、東西南北のあらゆる敵国に勝利し、その王国がしっかり確立されたことを見ました。この状況に至ってダビデはどうしたのでしょうか。「さあこれで安心だ！これからは食べて、飲んで、楽しめ！」と彼は言ったのではありませんでした。この9章には、ダビデがまず取り組んだことが記されています。それが「サウルの家に残りの人に真実を尽くす」ことです。なぜ彼はこのことをしたのでしょうか。その理由が1節に「ヨナタンのゆえに」とあります。ヨナタンとは、Ⅰサムエル記で見て来ましたように、イスラエルの初代王サウルの息子です。本来なら彼がイスラエルの2代目の王となる立場にありましたが、彼はダビデを愛し、ダビデが主に立てられた器であることを認めて、喜んで主の御心に従いました。ここでダビデがここで思い起こしているのは、Ⅰサムエル記20章で二人が交わした契約です。20章8節でダビデはヨナタンにこう言いました。「どうか、このしもべに真実を尽くしてください。主に誓って、しもべと契約を結んでくださったのですから。」ダビデはヨナタンに、あなたの父サウルが私を殺そうとしていることをあなたが知ったなら、隠さずそれを私に教えてほしいと頼みます。一方のヨナタンは、もしそれが事実なら、必ずあなたに教え、あなたが無事に逃れることができるように手配すると約束します。そしてヨナタンはダビデが将来、王になることを確信して、こう言いました。20章15節：「あなたの恵みを私の家からとこしえに断たないでください。主がダビデの敵を地の面から一人残らず断たれるときにも。」 当時は新しい王が誕生した暁には、それまでの王家は根絶やしにされました。安定した政権基盤を築くため、危険分子は滅ぼし尽くされたのです。しかし、どうか私と私の家に「恵み」を施して欲しいとヨナタンは求めます。この「恵み」という言葉と、先にダビデが語った「真実」という言葉は、ヘブル語では「ヘセド」という言葉です。これは契約の愛を表す特別な言葉で、「真実」、「恵み」の他に「慈しみ」、「あわれみ」、「誠実」、「忠実」などとも訳されます。ダビデはこのヨナタンとの約束を思い起こしています。しかしです。約束は交わしたからと言って私たちはいつもその通り守っているのでしょうか。しばしば様々な理由や理屈のもと

に、それが守られないままになっていることが往々にしてあるのではないのでしょうか。この時のダビデも理屈を並べて、かつての約束を無視することもできました。あの時からすでに長い年月が経過しています。またヨナタンはもう地上にいません。そしてヨナタンとの約束を守るためにダビデがしなければならないことは、「サウル家の人に恵みを施す」ことです。あの約束以降、自分がどんなにサウルによって迫害され、苦しめられて来たかを思えば、あの約束はもはや無効だ！と言いたくもなるのではないのでしょうか。しかしダビデはヨナタンへの約束を果たそうとしています。ここに彼の素晴らしい姿が示されています。いくらサウルの家が自分に対して悪を行なったとは言え、ヨナタンと交わした約束は約束。私はそれを守る！という態度をダビデは示しています。そのために敵であったサウルの家を祝福することになったとしても、私はそれをする。

しかしダビデはこれをただヨナタンとの人間的友情関係から行なったのではありませんでした。ダビデはサウルの家のもベツィバを呼び寄せて3節でこう言います。「サウルの家の者で、まだ、だれかいなか。私はその人に神の恵みを施そう。」ここに「神の恵みを」とあります。この「恵み」という言葉も、ヘブル語では先に触れたヘセドという言葉です。すなわちダビデはここで、神が私たちに示してくださったような恵みを私も施したいと言っています。神が私に示してくださったような慈しみ、あわれみ、真実をもって、私も施しをしたい。ここに意味されていることは、ダビデとヨナタンの間にある愛と慈しみの関係の根底には神がまず彼らに示されたヘセド・真実の愛があるということです。このヘセドという言葉は、神の私たちに対する一方的な愛、あわれみ、慈しみを指す場合に用いられています。たとえばイザヤ書 54 章 10 節：「たとえ山が移り、丘が動いても、わたしの真実の愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない」とあるところの「真実の愛」と訳されている言葉がそうです。あるいはイザヤ書 55 章 3 節：「わたしはあなたがたと永遠の契約を結ぶ。それは、ダビデへの確かで真実な約束である。」とあるところの「真実な約束」という言葉がそうです。ダビデもヨナタンもまず、この神の変わることがない愛、あわれみと慈しみに富む誠実な愛を経験しました。そして素晴らしい事実は、この神のヘセドを受けた彼らは、お互いの関係においても神のヘセドを映し出す交わりに生きたということです。今日の章でもダビデはヨナタンへの真実を果たす際、ただ人間的にそれをするのではなく、神に倣い、神を映し出す仕方で実行したいと言っています。先に見たように、ここには最後まで自分を迫害

したサウル家の者にも良くするという難しい課題がありましたが、ダビデは「神が私にしてくださったように、私もそのようにする」という仕方でこれを行ないたい、と願ったのです。

具体的にそれはどのようなになされたのでしょうか。ダビデはサウルのしもべツィバを通して、サウルの家に残っているのはメフィボシェテという人物であることを知ります。その人は足の不自由な人でした。ダビデはそれを知って、だからと言って、彼を軽んじることをしません。その人に恵みを施すことへと進みます。そして彼の居場所について、それはロ・デバルのアンミエルの子マキルの家であるという情報を得ます。ロ・デバルは、ヨルダン川東側マハナイムの近くであっただろうと考えられています。そのマハナイムはサウル家の生き残りがダビデに対抗して自分たちの本拠地としたところなのです。おそらくダビデに敗れて後も、サウル家の者たちはこの地方に多く生活していたのでしょう。そこにメフィボシェテもひっそり隠れるように生活していたのかもしれませんが。その彼がダビデの前に連れて来られます。彼は何を予想したのでしょうか。先に述べましたように、王朝の交替時に、一般的には前の王の子孫は皆殺しにされました。しかしダビデは、「恐れることはない」と言います。むしろ「私は、あなたの父ヨナタンのゆえに、あなたに恵みを施そう」と言い、2つのことを述べます。一つは「あなたの祖父サウルの地所をすべてあなたに返そう」ということです。サウルの家とダビデの家の戦いは長く続きましたが、ダビデが勝利する中で、サウルの所有地は今やダビデの支配下にあったのでしょう。ダビデはそれを何と全部メフィボシェテに返す！と言います！そして二つ目は「あなたはいつも私の食卓で食事をするようになる」ということです。同じ食卓を囲むことは近い関係に生きること、親しい交わりに生きることです。しかも王のテーブルと一緒に着かせていただくということは信じられないような話、驚くべき特権です。メフィボシェテは8節でこのように言います。「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださるとは。」彼がこのような驚きの声を発したのは良く理解できることです。しかしこの言葉に聞く時、私たちは少し前に出て来た、似たような言葉を思い起こさないでしょうか。それはダビデ契約に接したダビデが7章18節で発した言葉です。「神、主よ、私は何者でしょうか。私の家はいったい何なのでしょう。あなたが私をここまで導いてくださったとは。」ダビデは主からこのような恵みをいただいた者として、主のへセドを模範と

し、他の者にもそのように行なったのです。メフィボシェテの言葉に聞く時、ダビデは主がしてくださったように他者にもしたこと。ダビデの行動には神ご自身が映し出されていることを思わずにいられません。ダビデはこうしてサウルのしもベツィバに、メフィボシェテに与えた土地がふさわしく耕され、それが彼の家の食物となり、その家が祝福されるようにと言いつけ、配慮します。そして 11 節にある通り、メフィボシェテは王の息子たちの一人のように、王の食卓で食事をするようになったのです。

最後に短く目を留めたいのはメフィボシェテについてです。ダビデはサウルの家生き残りがどんな人であろうと神の恵みを施そうと思っていましたが、その相手が足の不自由なメフィボシェテであったことが、このエピソードの印象的な部分ではないでしょうか。彼はすでに 4 章 4 節に出て来ました。そこを見るとサウルとヨナタンの悲報がもたらされた時、彼は 5 歳で、乳母が彼を抱いて逃げる時、あまりに急いで逃げたので落としてしまったことが書かれています。そのために足の萎えた者になってしまった。それ以来、彼の人生はどんなに厳しいものだったのでしょうか。自分で自分を救うことはできません。他の人のあわれみによらなければ、生活の糧を得ることは困難だったでしょう。サウル家の生き残りとして明るい将来は描けず、暗い地域でひっそり生き、ひっそり死ぬしかない存在だったでしょう。ところがその彼が思わぬ恵みを受けました。考えられない祝福を受けることになりました。王から豊かな土地を与えられ、王のテーブルでいつも食事する者となりました。信じられない恵みです。もしここでダビデが神を映し出しているなら、メフィボシェテは誰を表しているでしょう。それは私たちではないでしょうか。私たちも神の御前に何の資格もない者たちでした。自分で自分を救うことができない無力な者であり、死の陰の谷で生きていたような者でした。そんな者たちが突然、光の中へ招き入れられ、豊かな富を相続する者とされました。また王の食卓にあずかり、王と交わる者とされました。このメフィボシェテの姿を通して、私たちは自分がどんなに大きな、また信じられないような恵みの中に導き入れられた者であるかを思い巡らすことができます。私たちは一人一人は主のメフィボシェテです。私たちは彼を見つめることを通して、自分が招き入れられた幸いについて感謝し、主がしてくださったことを思い、心から主を賛美するように導かれるのではないのでしょうか。

さて私たちはどうでしょう。私たちも様々な人との契約関係また約束関係の中で生き

ています。身近なところから言えば、結婚関係も然り、家族間の関係も然り。教会員同士の関係も然り。その他、様々な人間関係においても、私たちは色々な場面で公的・私的に多くの約束を交わして生きています。そのような人々との関係において、私たちは真実を尽くす歩みをしているのでしょうか。私たちは色々な言い訳をもって、そうしないことを正当化するものです。随分前の話であるとか、状況が変わったとか、相手が悪い、とか・・・。しかし今日のダビデの姿から学ばされることは、私たちはダビデのように、神が自分にしてくださったことを仰ぎ、その神の姿をモデルとして、他の人への関わりを導かれるべきであるということです。ですから大切なことはまず神が私に示してくださった慈しみ、真実、ヘセドの愛を感謝をもって受け止めること。どのように大きなあわれみを自分は受けて、今日、生かしていただいているかを知ることです。そしてその神を仰ぎ、神が私にしてくださったように私も他の人へして行くということ。今日の章のダビデの行動には、彼が主の真実の愛をどのように受け止め、感謝し、その恵みの中に生きた人であったかが示されています。果たして私たちの生活はどうでしょうか。私たちの行動には私たちが主の真実、慈しみ、あわれみ、誠実を心から感謝し、その恵みに生きている者であることが示されているのでしょうか。主の真実な愛に導かれて、私たちも伴侶との関係、家族との関係、兄弟姉妹との交わり、その他の多くの人間関係において、「主が私にしてくださったように、私もそのようにしよう」と導かれますように。そして私たちの生活を通して主を映し出し、主の真実を人々に分かち合い、これを広げて行く幸いに歩みたいと思います。